

ユーフォニアム 庄司恵子さんの アンブシュア

「無理なく」「よい音」で吹く練習を するうちに、自然と理想的な アンブシュアが得られます

Euphonium

昨年シエナ・ウインド・オーケストラの新メンバーになった庄司恵子さん。学生時代にいろいろと悩んだ「アンブシュア」について、貴重な体験談を交えて教えてくださいました。



私は、よい音が出て自分の思う通りの音が奏でられれば、それがよいアンブシュアだと思います。よいアンブシュアを作るには、最初に形から入るのではなく、無理のない音域で、よい音で吹くことを念頭に練習しないといけないでしょう。単に音が出るということではなく、「音をよくしていく」ということを大切に練習すれば、自然とよいアンブシュアや奏法が備わっていくでしょう。ただ私も含め、マウスピースに対する上唇と下唇の割合は、2:1が一般的なようです。

●私のアンブシュア遍歴

私は中学生のときに先生から、「唇を横に引きすぎて押しの強い音になっているから、鏡を見ながら引かずに吹けるように」と指導を受けたのですが、すでに癖を引かないと全く音が出ない状態だったので、中学生のときは結局そのままのアンブシュアで吹きました。でも少し吹くと頬が疲れて痛かったり、マウスピースも押しつけて吹いていたらしく、口に当たるところが痛かったです。唇を引いてマウスピースを押しつけて…今考えると悪い見本のような吹き方でした。

高校の部活では、基礎練習でロングトーン、インターバル、リップスラー、タンギング、スケールを必ず毎日みっちり練習していました。が、きれいな音で吹くように気をつけていたら、気がつくや唇を引かなくても音が出せるようになっており、頬やマウスピースが当たるところの痛みもなくなっていました。

大きく変わったのは大学時代です。ある日練習しながら、自分が人を教えるときに言うていることを思い出して音を出そうとしたら、「違

●アンブシュアの改造に着手

練習を始めた頃は、1オクターヴも音がでなかったのですが、1オクターヴが出なかつたのは最初の1週間くらいで、むしろ力を抜いたアンブシュアに変えたいか吹いていたら3か月後には以前の音域が自然と出るようになりました。そのときに変わった練習は、ゆるりしたテンプでのロングトーン、インターバル、リップスラーなど、本当に初心者ができるのと同じような内容でした。

その際のメニューは自分で考えたものでした

クローズアップ・アンブシュア 庄司さんの場合



セッティングその2 同じに角度になるように楽器を構えて吹く。アゴはあまり下に引きすぎると音色が悪くなる時がある

セッティングその1 顔は自然に前を向いて、そこにマウスピースを持ってきてバズィングする。マウスピースに対して、上唇2:下唇1くらい割合



高音域をメゾ・フォルテで

低音域をメゾ・フォルテで。低くなるほどリムの内側全体を使って振動するように

中音域をメゾ・フォルテで



中音域をピアノで。少しの息でも唇が振動するようにリラックスしている



中音域をフォルテで。強く息を出すときにアンブシュアを保つために頬に張りが出てくる。最初から形を作るのではなく、結果的にそうなるのが望ましい

●効率のよい振動が得られるように

今でも自然で効率のよい音の出し方には気

が、「アンブシュア・ビルダー」(リトル著)という本には、簡単なインターバルやリップスラーの練習が載っていてオススメです。またトロンボーン奏者が書いた教則本ですが、レミントンンの「ウォームアップ・スタディ」は高校生のときから練習に使っています。

をつけていて、ウォーミングアップでは、自分の息に敏感に反応する繊細な唇の状態になるように確認しています。「振動をおこす」のではなく「振動がおこる」ようなリラクセスした効率のよい音の出方ですね。少しの息でもよく振動する唇であれば耐久力も長くなります。「写真」を参考にしてみてください。

また今回は、他の金管楽器の方もレクチャーされるということなので、トロンボーンなど、他の楽器のページの説明も読んで、参考にできるところは試してみたいと思います。